

大江健三郎『喝采』の男性同性愛表象

黒岩裕市

はじめに

日本の文学作品において男性同性愛の問題を考える時に、大江健三郎の重要性はこれまでも指摘されてきた。たとえば、「同性愛のプロブレマティック」(1995年)と題された対談の中で、浅田彰は「一般に、近代文学における同性愛というと、三島がパラダイムだということになっているけれども、むしろ大江なんかのほうが重要ではないか」(浅田・渡辺 1995, 126)と述べている。また、野崎歓も「ゲイ文学を突き抜ける——現代文学の伏流」(1995年)という鼎談で、「三島より大江だという、あれは本当に言い得て妙だと思うんです」(越川・柿沼・野崎 1995, 31)と浅田の見解を受け継いでいる。

一方、大江の男性同性愛表象に的を絞った先行研究としては、まずは、キース・ヴィンセント「大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモファシズムとその不満」(1998年)が挙げられる。同論文では、大江の『われらの時代』(1959年)や『セヴンティーン』(1961年)が「同性愛をファシズムの基盤としてはたらく主体性の病いとして病理化するモデルを固定する」(ヴィンセント 1998, 135)ものであることが指摘される。

新城郁夫『沖縄を聞く』(2010年)では大江の『沖縄ノート』(1970年)のあるエピソードに光が当てられている。それは沖縄へ向かう船の中で、「花のように美しい沖縄の少年たち」と彼らを誘惑しようとする「性的倒錯者のアメリカ人」、そしてその誘惑劇をカーテンの中から覗き見る「本土の日本人」である大江という男性たちの関係を綴ったものである。新城はそこに「日米そして沖縄をめぐる政治的抗争を異性愛的ジェンダー配置において比喩化していく典型的なアレゴリー化」よりも、むしろそれが「過剰なまでのホモエロティクスの超出において解体されていく過程」、すなわち、「ホモエロティクスの「主体」解体の政治性」を見る(新城 2010, 188-189, 192)。

また、福嶋亮大「大江健三郎の神話装置——ホモエロティシズム・虚構・擬似私小説」（2011年）は、「初期大江の同性愛的イメージがいかに組み替えられたかという問い」を立て、2000年以降の大江作品を中心に、「ホモエロティシズムの変換」をたどるものである（福嶋2011, 270, 279）。

本稿ではこれらの先行研究を参考にしつつ、大江健三郎が1958年に発表した『喝采』という短編の男性同性愛表象を分析する。最初に1958年頃に男性同性愛がどのように語られていたのかを概観し、続いて『喝采』と同時期の大江の作品に出現する男性同性愛に目を向ける。そのうえで『喝采』を取り上げ、最終的には『喝采』という作品の読みを、ゲイ・スタディーズへとつなげることを模索したい。

1. 男性同性愛の〈戦後〉

『喝采』が発表された1958年頃の男性同性愛にまつわる言説を検討することから始めよう。その際、〈戦後〉の男性同性愛の特徴としてどのようなことが挙げられているのかに注目する。日本の同性愛の実態をまとめることを目的に、医学者の太田典礼が執筆・編集し、1957年に出版した『第三の性』を中心に、富田英三のルポルタージュ『ゲイ』（1958年）、扇屋亜夫の小説集『そどもあ挽歌』（1958年）、鹿火屋一彦のルポルタージュ『夜の異端者』（1958年）、櫻村幹夫の小説『男色の部屋』（1959年）などを取り上げる。ちなみに、この時期に男性同性愛関連の書物が次々と出版された背景には、1957年に丸山明宏が歌った「メケメケ」がヒットし、〈シスターボーイ〉がメディアで持てはやされたことがある。

『第三の性』冒頭の「同性愛とくに男性の同性愛の増加は戦後の性文化の一つの特長ということができよう」（太田編1957=1987, 13）という一文が示すように、〈戦後〉の第一の特徴として、男性同性愛の「増加」が挙げられる。富田英三の『ゲイ』でも「とにかく、おそるべき勢いであるのは、ゲイの少年の増加であり、そしてまた、かくれた、ゲイ愛好者に、公然のゲイ趣味者の増加である」（富田1958=2009, 184）と述べられ、そこでも「ゲイ」の「増加」が強調されている。

それでは〈戦後〉になぜ男性同性愛は「増加」したというのだろうか。『第三の性』で太田は次のように説明している。

どこの国でも、戦争のあとには同性愛が多くなるといわれている。戦場での習慣をもちかえるためもあり、一般に性生活にみだれがあるからだと考えられている。日本ではとくに敗戦による混乱があり、一方にはいろんな性的刺激は強く、更に外人がその風習をまきちらしていることも見逃がせない。外人が動機になったのも少なくないようだし、外人専門の男娼もある（太田編 1957=1987, 61）。

〈現在〉の「性生活」の「みだれ」の好例として同性愛の「増加」が持ち出されるのは現代でも行なわれることだが、太田がそこで「戦争」や「戦場」に言及している点は注目されよう。時代は少し遡るが、1949年に出版され、評判となった角達也の『男娼の森』にも「戦争の為に、軍隊内で、徴用工場で、防空壕内で非常に多数の男色愛好の習癖者が出来ていた」（角 1949=2009, 49-50）という一節があり、作中に登場する中島という作家は「南方駐屯の軍隊を背景に腐敗将校の変態性と戦場における男娼の発生の問題」（角 1949=2009, 146）を主題とした劇の台本を書いている。つまり、男性同性愛は「戦争」や「戦場」からもたらされたものと解釈されているのである。それはホモフォビックに戦争批判の材料になる場合もあれば、ホモエロティックなノスタルジアを満たす読み物になる場合もある。

さらに、〈戦後〉の男性同性愛の「増加」に関して、『第三の性』では男性同性愛と「外人」を結びつけて説明している。換言すれば、同性愛とは外国から日本に、外国人男性によってもたらされるという見解である。このような見方は、同時期に出された書物にも散見される。たとえば、鹿火屋一彦は、『夜の異端者』の冒頭に「戦後、アメリカ軍の進駐と共に、外人に多い同性愛者の相手をする男性が輩出し、これがゲイ・ボーイと称されるようになった。アメリカさんの少なくなった昨今では、これが日本人相手のゲイ・ボーイとして街に跳梁している」（鹿火屋 1958, 12）と記しており、〈現在〉の「ゲイ・ボーイ」の「跳梁」の根源に「アメリカ軍」の存在を見ている。

男性同士の様々な性愛を綴った扇屋亜夫の小説集『そどもあ挽歌』にも外国人男性と日本人男性のペアを主題とした作品は含まれている。また、樫村幹夫の小説『男色の部屋』の「ぼく」は立川からやってくるジャックというパトロンを持

ち、「外人のオンリー・ボーイ」（樫村 1959=2009, 40）を自認している。外国人男性との性愛に関しても、『そどみあ挽歌』の一つの短編のように、「国境を越えた、愛情」（扇屋 1958=2009, 155）として讃美される場合もあれば、『男色の部屋』のように、「ぼくは精神をまで売り、外人のなぐさみものという境遇に溺れきってはいない——と、そんなプライドがあった」（樫村 1959=2009, 40-41）とむしる外国人嫌悪をかき立てる要因として持ち出される場合もある。

こうした男性同性愛の「増加」の他に、〈戦後〉の特徴として挙げられる現象として、「男役」と「女役」——当時の言葉を使えば、「ペデラスト」の「ペデ」と「ウールニング」と「ウル」——に関わる指摘がある。太田は、「昔の男色は性的交渉を主としたいわゆる鶯姦で、肛門性交であったから、男役と女役がはっきりしていたといえるが、今日の同性愛は肛門以外のベッティング（愛撫）ことに相互手淫、口淫が盛んであり、そのせいか対等形、相互交替形が多い」（太田編 1957=1987, 30）と述べている。さらにそこに男女の性愛の模倣ではない「本格的な同性愛」（太田編 1957=1987, 42）の可能性までも示唆している。

『第三の性』には、太田典礼の論考だけではなく、鹿火屋一彦による「実態調査のレポート」も収録されている。それは、1954年6月から1957年1月までに、鹿火屋が155名の男性同性愛者から得た調査表の回答をまとめたものであるのだが、そこでも「受動的か能動的か」という質問に対して、「能動的でもあり受動的でもある」という回答が58件で「能動的」や「受動的」の数を僅かながら上回っている。それを踏まえて、鹿火屋は「同一の相手と相互的に能動受動する」ことを「戦後派的傾向」と見なし、「快楽はできるだけ多くという戦後の風潮」と関連づけて解釈している（太田編 1957=1987, 151, 152, 153）。

以上のような男性同性愛の〈戦後〉の特徴と大江の作品の男性同性愛表象がいかなる共通点や相違点を持っているのかについては、また後ほど検討しよう。

2. 大江健三郎と「男性同性愛の亡霊」

続いて大江健三郎の男性同性愛表象に目を向ける。まずは大江という作家について簡単に触れよう。大江は東京大学フランス文学科在学中の1957年、『奇妙な仕事』が五月祭賞受賞作として『東京大学新聞』に掲載され、平野謙の評価を受

ける。それをきっかけにして、文壇で注目されるようになった。同年8月には『死者の奢り』を、翌1958年1月には『飼育』を発表し、同年7月に第39回芥川賞を受賞。その頃から大江の作風は変化し、「都会に生活する孤独な夢想家の青年たち」（江藤 1973, 279）が登場するようになる。そして、彼らに焦点を当てることで、大江は「セックスと政治との統一的把握という困難きわまる文学的課題」（平野 1975, 496）、つまり、「性と政治」の問題に取りかかるようになったのである。

その出発点となるのが『文學界』1958年6月号に掲載された『見るまえに跳べ』と、それ以降に書かれ、単行本『見るまえに跳べ』（新潮社1958年10月）に収録されることになるいくつかの作品——『見るまえに跳べ』、『暗い川 おもい懼』、『喝采』、『戦いの今日』、『不意の啞』——である。大江は単行本『見るまえに跳べ』の「後記」に、「強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にある日本人、それにその中間者としての存在（外国人相手の娼婦や通訳など）、この三者の相関をえがくことが、すべての作品においてくりかえされた主題でした」（大江 1958e, 251）と述べている。『不意の啞』以外、「中間者」の役割を担うのは、「外国人相手の娼婦」である。平野謙が指摘するように、この「三者の相関」を通して、「作者 [大江] はオキュバイド・ジャパンそのものを象徴化させようと企てた」（平野 1975, 499）と考えられるのだが、興味深いことに、そこに「男性同性愛の亡霊」（ヴァンセント 1998, 136）がとりついているのである¹。

単行本のタイトルにもなっている『見るまえに跳べ』では、本郷の大学でフランス文学を専攻している大学生の「ほく」と外国の雑誌の特派員であるガブリエル、「外国人相手の娼婦」である良重の「三者の相関」が描かれる。ガブリエルは「戦争いらい、日本人はじつにおとなしく」なり、「見てるだけ」で、決して「跳びだす勇氣は持っていない」と述べ、それとは対照的に作家のサドを「見るまえに跳んだ連中の代表」として称賛する。そして、「ほく」との会話にサドが出てきた際、「大仰に感激してほくの手を握りしめ」るのだが、その光景を見た良重は唐突に「男色みたいなことをしないでよ」と言う（大江 1958a, 16）。「男色」がテキストに現れるのである。

『暗い川 おもい懼』（『新潮』1958年7月号）における「三者の相関」は、中学生の「かれ」、「外国人相手の娼婦」である「隣の女」、その相手の黒人兵のピーターソンによるものである。「かれ」はピーターソンと喧嘩をした「隣の女」

と性行為を行ない、彼女との結婚を一方的に夢想する。だが、結局は隣の部屋で彼女とピーターソンとの性行為が再開し、行為の後で「隣りの女」が洗浄する音聞き、「屈辱」（大江 1958b, 131）にまみれる。本稿で着目したいのは、作品冒頭、本筋に入る前に、全裸で無防備にベッドに腰をおろしている「かれ」が、突然、「剛い胸毛のはえた男におそわれたなら、うむをいわず凌辱されるだろう」というお気に入りの空想を抱く一節である。「そう空想するたびに、かれは自分がやがて男色家になるのではないかとうたがっていた」のである（大江 1958b, 119）。テキストでは「剛い胸毛のはえた男」とピーターソンがだぶらされることになるのだが、ここでもまさに「亡霊」のように男性同性愛がテキストに出没するのである。

『戦いの今日』（『中央公論』1959年9月号）にはより説明的な記述がある。『戦いの今日』は、大学生の「かれ」とその弟が、「外国人相手の娼婦」である菊栄を介して、脱走兵のアシュレイをかくまうという物語であるのだが、「かれ」と弟とアシュレイが映画を観に行く場面には、次のような一節がある。

かれと弟のあいだにかけたアシュレイの躰は雨に濡れ駈けてきたために熱をおびて、身動きするたびにむんむん臭いたてていた。おれには男色家としての素質、その種の偏向はないはずだろう、とかれは眼をつむり座席にふかぶかと腰をうずめて考えた。おれは地方の健康な中流家庭に育ち、ほとんど心理的な外傷をうけないで本郷の大学へ入学した、そしていま眼だたないごくふつうの大学生だ。おれがアシュレイから情欲的なものをうけとるのは、おれが弱いアシュレイを庇護する強者という立場になれてしまいはじめた証拠だろう。男と男とのあいだの従属関係、外国人と日本人とのあいだにある親密なそれは、時々正常でない性欲とむすびついて感じられるときもあるだろう。そしていま、日本人のおれに従属しているのが外国人のアシュレイだ、とかれは満足して考え、眼をひらいた（大江 1958c, 355）。

「かれ」は雨に濡れたアシュレイの身体が放つ「力強くしつこい外国人の体臭」（大江 1958c, 355）に思わず「情欲的なもの」を感じてしまうのである。『戦いの今日』では、日本人の「かれ」にアメリカ人のアシュレイが従属するという設定

で、「強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にある日本人」という支配／従属の関係とは立場が逆転しているのだが、その優位性ゆえに「かれ」は「情欲的なもの」に満足さえするのである。「かれ」が「男色家としての素質、その種の偏向はないはずだろう」と断っている以上、このテキストからは外国人男性との交流が日本人男性の中に誘発するものとしての同性愛という見解がうかがえる。

『見るまえに跳べ』、『暗い川 おもい懼』、『戦いの今日』では「男と男とのあいだの従属関係」、特に「外国人相手の娼婦」である女性を媒介とした「外国人と日本人とのあいだにある親密なそれ〔従属関係〕」が語られる際に、テキストに「亡霊」のように同性愛が出現する。だが、単行本『見るまえに跳べ』には、より明示的に男性同性愛が語られる作品も収録されている。『文學界』1958年9月号に発表された『喝采』である。

3. 『喝采』の男性同性愛表象

『喝采』に登場する夏男は、本郷の大学に通う日本人男性で、「他の学生たちからはなれて」、「四十歳の外国人の男色家とくらしている」（大江 1958d, 9）。この「外国人の男色家」とは、大使館に勤めているリュシアンというフランス人である。同級生に「あいつは、フランス人にやしなわれて一緒に寝てるんだ。[…]

とにかくあいつが痔を悪くして、その小父さまに治療費まで出させていることは確かなんだ」などと揶揄されても、夏男は「屈辱にまみれて唇をかみしめ」るだけである（大江 1958d, 12）。

この夏男とリュシアンの間に、「外国人相手の娼婦」である康子という女性が介入することになる。日本人男性が女性を媒介にして外国人男性と結びつこうとする『見るまえに跳べ』のパターンは変質し、『喝采』ではあらかじめ性愛的に結びついた日本人男性と外国人男性の間に女性が入り込む展開になっている。夏男とリュシアンの家に康子がやってきたことで、すぐに性的な面で夏男に次のような変化が生じる。

夏男はベッドに横たわり、あごを深ぶかと枕にうずめてじつとしていた。階

下で、康子・ホガアトが厚ぼつたい脛をとごし椅子によりかかっていることを考え、その脛の下の冷静な眼を考えるとかれの躰が裸になつてベッドに横たわるだけでおこす期待にみちた欲望の充実が、急速にうつろになつて行くのだ。そしてリュシアン¹の汗に濡れた剛い胸毛がかれのなめらかな背のくほみに、ふいにふれた時、かれは足をかたくしめつけてしまうことを克服できないのだ（大江 1958d, 14-15）。

康子の存在、特に「その脛の下の冷静な眼」を考えると、夏男は「足をかたくしめつけてしまうことを克服できない」のである。すなわち、足を開き、リュシアン¹の求めに応じることができなくなるというのである。

康子の存在は夏男にさらなる波紋をもたらす。レストランで「中年の男」に「おかま」と罵られ、殴りつけられた夏男は、「おれは男色だ」、「おかまやろうだ」と自嘲的に康子に言う。一方、康子は「大丈夫よ、勇気をだすのよ、あんたにできないことはないわ」と返答し、二人は性行為を試みることになる（大江 1958d, 18）。そして康子との性行為の後、夏男は「毎夜リュシアン¹の躰にくみしかれて、快樂のために女のようにすすり泣いていたおれが、いま男としてこいつを愛したのだ」（大江 1958d, 18）と考え、「おれは男だ」、「男らしいことのできる人間だ」、「拍手喝采だ」（大江 1958d, 19）とあたかも自身の不安をかき消すかのように繰り返す。要するに、夏男は、リュシアン¹との性行為によって女性化されていた自らが、康子との性行為によって男性性を回復したと考えているのである。その基盤にあるのが、男性は男性に「くみしかれ」、足を開き、挿入されると男性ではなくなり、女性に挿入することで男性になるという、露骨なミソジニーとホモフォビア、さらに性器中心主義に裏づけられたヘテロセクシズムであることは明白である。

康子との性行為の翌朝、夏男は「市民の健全な日常生活」（大江 1958d, 19）を取り戻し、電車の中で「周りの人々と連帯しあっている仲間だという感じにみたされ」（大江 1958d, 20）る。そして、リュシアン¹に向かって、「おれはフランス人の男のあんたに愛されていることの屈辱に耐えようと思わなくなつたんだ」（傍点引用者）と別れを切り出す。そのことが示すように、夏男が回復したと思っている男性性とは、日本人としての男性性に他ならない。リュシアン¹との「屈辱」的な「汚らしい愛」ではなく、「汚らしい黄色の皮膚の日本人」との連帯を

夏男は求めるのだ（大江 1958d, 21）。つまり、日本人女性である康子に挿入することが夏男を日本人の男性にしたということなのである。したがって、康子は、単行本『見るまえに跳べ』の「後記」で述べられていた日本人と外国人の「中間者」ではなく、夏男と他の日本人との「中間者」の役目を担わされていると言えよう。翻って考えれば、リュシアンという外国人男性に挿入されることは、夏男の男性性を喪失させるだけではなく、彼の〈日本人性〉とでも言うべきものを危機に曝すことになるのである²。

だが、このような男性性と男性性に基づいた〈日本人性〉の回復は、夏男の妄想でしかない。作品終盤ではそのことが容赦なく暴かれる。康子の意向を確認することもなく、彼女との結婚を口にする夏男をリュシアンは嘲笑し、「職業的なすれつからしの男色家」がマスターをつとめる銀座のバーに連れて行く。そこで康子が「男の子どうしの愛人たちと三人ひとくみでくらす種類の娼婦」であり、「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりに楽しませたりする」ことが明かされる（大江 1958d, 23）。康子は女性に対して「不能」（大江 1958d, 24）な男性を求めるというのである。それは夏男自身が「不能」であることを証明するものであり、その結果、回復されたはずの夏男の男性性、及び、〈日本人性〉は崩壊する。

物語の最後、夏男はリュシアンのもとに戻る。康子を追い出し、「こんな comédie は忘れてしまおう、さかんな拍手、それでおわりだ」と言うリュシアンに、夏男は自嘲的に「おれのおかまやろう、おれにこそ拍手喝采だ」と心の中で応じる（大江 1958d, 26）。こうした顛末は夏男にとっては「屈辱」に他ならない。「強者としての外国人」であるリュシアンに対し、夏男は再び「屈辱的な立場にある日本人」になるということである。

ここで、先ほど概観した男性同性愛の〈戦後〉と比較検討してみたい。『喝采』をはじめとする大江の作品では外国人男性と日本人男性の同性愛が反復される。それは外国人男性へのホモエロティックな欲望とホモフォビアが入り混じったものであり。男性同性愛の〈戦後〉の特徴とも共通している。だが、大江作品では外国人男性と日本人男性の支配／従属関係を鮮烈に表すものとして男性同性愛が持ち出されるため、同性愛が外国人男性に由来するという見解は過度にパターン化している。一方、黒人兵や脱走兵が登場しても、『見るまえに跳べ』の段階の

大江作品では、同性愛が「戦争」や「戦場」からもたらされるという見解はあまり明確ではない。また、『戦いの今日』の一節が示すように、この時期の大江作品においては、男性同士の〈親密性〉は「従属関係」と結びつけられる傾向にあるため、「対等形、相互交替形が多い」という〈戦後〉の特徴ともかけ離れたものになっている。

さて、『喝采』については、同時代評でも〈性と政治〉の問題に焦点が当てられている。たとえば、本多秋五は『図書新聞』の「文芸時評」（1958年）で、『喝采』、『不意の啞』、『戦いの今日』の中で『喝采』が「もっとも高い密度がある」と評し、「男娼というものが、性的意味にかさね合わせて政治的または思想的意味をもたなかったら、大江の作品の大江らしさは失われるだろう」と述べている（本多 1995, 461）。一方、澁澤龍彦は1958年の鼎談で、本多の評価に「性的意味と政治的意味とが重なり合って大江の作品は成り立つなんて、むしろ「喝采」をほめてるけど、「喝采」は愚作でしょう」と酷評している（江藤・篠田・澁澤 1995, 211）。後年になっても、篠原茂は『喝采』に関して、「セックスにおける不能＝従属を素材に民族的屈辱を描こうとする意図が見えすぎて、成功した作品とはいえない」と論じる（篠原 1998, 49）。

なるほど、『喝采』における〈性と政治〉の問題はわかりやすいものであるかもしれない。しかしこのテキストにはそうしたわかりやすさをかき乱すようなノイズも含まれている。夏男がリュシアンのもとに戻り、再び「屈辱」に陥る過程で、二人の男性の身体接触が具体的に描かれる箇所には次のような一節がある。

リュシアンの方強い腕が夏男をしつかり抱きしめ、夏男は懐しい匂いのするリュシアンの方に顔をうずめた。リュシアンが夏男の頭をもちあげ、シャツの胸をはだけて再び夏男の頭をそこに戻した。夏男は汗ばんでやわらくなった胸毛に頬と鼻孔をうずめそのからみついてくる匂いをかいだ。じつにせんさいな、慣れたしんできた戦慄がかれの腰のあたりの皮膚から躰いちめん皮膚へ、毛穴の一つひとつをひらかせるようなしかたでひろがついていつた（大江 1958d, 26）。

ここでも「強者としての外国人」である「力強い」リュシアンに、「屈辱的な立場にある日本人」の夏男が従属するということになるのかもしれないが、本稿では、リュシアンの「匂い」が夏男に「からみつ」き、「じつにせんさいな、慣れしたしんできた戦慄」となり、「毛穴」を開かせるかのように、夏男の全身の皮膚に拡散していく点に注目したい。つまり、夏男の皮膚が穴だらけになるのである。言い換えれば、皮膚が一人の人間の内部と外部の境界として機能しなくなり、その人間の輪郭を曖昧にするのだ。そこに支配／従属の関係性は成立し得るだろうか。新城が述べる「ホモエロティクスの「主体」解体の政治性」がここにも指摘できるのではないか。

それだけではなく、「黄色の皮膚の日本人」という表現が示すように、このテキストで皮膚は〈日本人性〉を表象し、日本人と外国人、さらには日本と外国の境界として機能するものでもあったわけだが、リュシアンとの身体接触や彼の「匂い」が、その境界を無化していくのである。そもそもホモエロティックな「戦慄」が全身の皮膚に拡散するということは、男性同士の支配／従属の関係を示すために、テキストで反復された挿入する／されるといった局所的な性器的行為を越えるものであり、『喝采』の根底にあった性器中心主義をも揺らがせることになる。

確かに、『喝采』の男性同性愛は「強者としての外国人」と「屈辱的な立場にある日本人」の関係を表すものである。だが同時に、男性同性愛は性器的行為に限定されることもなく拡散し、境界として機能する皮膚を穴だらけにし、その結果、外国人男性と日本人男性との支配／従属の関係性にも風穴を開け、流動化させる。その瞬間にこそ、おそらく当時の大江が想定していた外国人男性と日本人男性の親密な「従属関係」、さらには男性同士の関係を通して暗示される国家間の親密な「従属関係」——それはヘテロセクシズムに基づいたものであったわけだが——を解体する、新たな〈親密性〉の可能性が潜んでいるように思われる。そこに『喝采』の表面上の〈性と政治〉とは別の〈性と政治〉が見出せるのではないか³。

おわりに

本稿はここまで大江健三郎の『喝采』における男性同性愛表象を読んできたが、

最後に本稿の読みをゲイ・スタディーズの取り組みにつなげることを考えてみたい。

「ゲイ・スタディーズの可能性とその射程を提示する日本で初めての書」(ヴィンセント・風間・河口 1997, 2) である『ゲイ・スタディーズ』(1997年)では、「同性愛者を「彼ら」という距離と排除を含んだ主語で指すことをやめて「わたし」を見失うことなく「私たち」を主語とする」(ヴィンセント・風間・河口 1997, 63) ため、すなわち、異性愛社会で一方向的に語られる対象であったゲイが自らの名前と声を獲得するために、「ゲイ理論」構築の必要性が唱えられる。しかし、このような試みにおいて、「ゲイ」とは決して固定的なものでも安定的なものでもない。次のように説明される。

ホモフォビックな社会がホモフォビックに描く「彼ら」と向き合い、そのホモフォビックな言説を解明する理論も必要なのだ。そうするうちにまた、そのような同性愛に関する最も毒々しくホモフォビックなイメージの中にも素晴らしい「私たち」と「わたし」とが眠っていることに気づいてくるのだ。このように、悪質なステレオタイプと向き合うとき、それを単に否定するだけでなく、その存在が示すゲイの社会的な位置づけを解明し、その中からすらも肯定的な、時には革命的な要素を抽出していくことこそが「ゲイとして理論する」ことの意味である。その作業は肯定的なゲイ理論の構築を進化させながら、その前提となる「ゲイ」の意味を絶えずずらし、再構築することにもつながるのだ (ヴィンセント・風間・河口 1997, 63)。

つまり、「ゲイとして理論する」ことを通して、今ここにある「ゲイ」を変化させていくことが重視されているのである。そして、そうした「ゲイ」の変容過程においては、たとえ「毒々しくホモフォビックなイメージ」や「悪質なステレオタイプ」であっても、「肯定的な、時には革命的な要素を抽出」し得るものとして、積極的に利用することの重要性が強調されているのである。

『喝采』の男性同性愛表象もまたヘテロセクシズムに基づいた「毒々しくホモフォビックなイメージ」と呼ぶべきものかもしれない。しかし、本稿の読みが示したように、そうした「ホモフォビックなイメージ」の中にもヘテロセクシズム

を瓦解させる瞬間が見出せるのである。そのような意味で、『喝采』というテクストに一瞬出現する、皮膚を穴だらけにすることで境界を壊していく男性同性愛の拡散性は、「ゲイ」の意味を絶えずずらし、再構築することにもつながる」手がかりを提供するものなのではないだろうか。

注

- 1 大江健三郎における〈性と政治〉を考える際にしばしば言及されるのが、「われらの性の世界」(1959年)というエッセイである。大江はそこで現代の人間を「政治的人間」と「性的人間」によって理解しようとする。「政治的人間」は、他者と対立し、抗争することで存在する。一方、「性的人間」は「臍が陽根をうけられるように」、「牝が強大な牡に従属するように」他者に従属する。さらに大江は「政治的人間」と「性的人間」を国家の関係にも敷衍し、安保体制下で「現代日本は、性的人間の国家と化し、強大な牡アメリカの性的従属者として屈服し安佚を享受している」と考える(大江1959, 156, 157)。このように露骨にヘテロセクシュアルな比喻が持ち出されるのだが、「政治的人間」と勃起した男性性器、「性的人間」と委縮したそれが重ねられていることが示すように、このエッセイの「人間」は男性であることを暗黙の前提としている。そのため、ここからも男性同性愛のイメージが喚起される。
- 2 趙正民「戦後の日米関係像——ジェンダー的布置とその解体」では、『暗い川 おもい懼』や『喝采』が取り上げられ、「[中間者]としての康子は、夏男を「男性性」のもつ「健康」な「日本人」として作り上げる一方、そのような属性が「暫定的」なものにすぎないこと、フィクションであることをも同時に示唆する者であった」と康子の役割が論じられている(趙2003, 103)。
- 3 引用した箇所からは、『喝采』の男性同性愛表象の基盤にあったヘテロセクシズムや性器中心主義をずらす契機が見出せる。本稿ではそれを『喝采』の潜在的な〈性と政治〉として肯定的に論じている。だが、ミソジニーについてはどうか。「男役」と「女役」、あるいは、男性性／女性性が二元論的に成り立たなくなると言うことは言えるとしても、夏男とリュシアンとの男性同士の性愛の背後では、康子という女性がいったん持ち出されたうえで、容赦なく排除されていたわけであり、たとえ夏男の皮膚が輪郭をなくしたとしても、康子をめぐるミソジニーは残存する。

引用文献

- 浅田彰・渡辺守章、1995、「同性愛のプロブレマティック」『文学』第6巻第1号。
 趙正民、2003、「戦後の日米関係像——ジェンダー的布置とその解体」『論叙Ⅱ』第6号。
 江藤淳、1973、「大江健三郎——自己回復と自己処罰」『作家の肖像』講談社。
 江藤淳・篠田一士・澁澤龍彦、1995、「大江健三郎の文学」(『澁澤龍彦全集』別巻第2巻、河出書房新社)。
 平野謙、1975、『平野謙全集』第9巻、新潮社。
 本多秋五、1995、「芸芸時評」『本多秋五全集』第6巻、青柿堂。
 福嶋亮大、2011、「大江健三郎の神話装置——ホモエロティシズム・虚構・擬似私小説」『早稲田文学』第10次第4号。
 鹿火屋一彦、1958、『夜の異端者』南旺社。
 櫻村幹夫、1959、『男色の部屋』光書房(『近代日本のセクシュアリティ』第31巻、ゆまに書房、2009年)。

- 越川芳明・柿沼瑛子・野崎愷、1995、「ゲイ文学を突き抜ける——現代文学の伏流」『ユリイカ』第27巻第13号。
- 大江健三郎、1958a、『見るまえに跳べ』『文學界』第12巻第6号。
- 、1958b、『暗い川 おもい懼』『新潮』第55巻第7号。
- 、1958c、『戦いの今日』『中央公論』第73巻第9号。
- 、1958d、『喝采』『文學界』第12巻第9号。
- 、1958e、『後記』『見るまえに跳べ』新潮社。
- 、1959、「われらの性の世界」『群像』第14巻第12号。
- 扇屋亜夫、1958、『そどみあ挽歌』新鋭社（『近代日本のセクシュアリティ』第31巻、ゆまに書房、2009年）。
- 太田典礼（編著）、1957、『第三の性——性は崩壊するのか』妙義出版（人間の科学社、普及版、1987年）。
- 新城郁夫、2010、『沖繩を聞く』みすず書房。
- 篠原茂、1998、『全著作・年譜・文献完全ガイド 大江健三郎文学事典』森田出版。
- 角達也、1949、『男娼の森』日比谷出版社（『近代日本のセクシュアリティ』第30巻、ゆまに書房、2009年）。
- 富田英三、1958、『ゲイ』東京書房（『近代日本のセクシュアリティ』第30巻、ゆまに書房、2009年）。
- ヴィンセントキース、1998、「大江健三郎と三島由紀夫の作品におけるホモファシズムとその不満」（竹内孝宏訳）『批評空間』第2期第16号。
- ヴィンセントキース・風間孝・河口和也、1997、『ゲイ・スタディーズ』青土社。